

2020 年度事業 進捗報告書（実行団体）

- 提出日 : 2022 年 9 月 30 日
- 事業名 : 社会的処方を目指した生態系モデル構築事業
- 資金分配団体 : 認定特定非営利活動法人富士山クラブ（甲信地域休眠預金等活用コンソーシアム）
- 実行団体 : 特定非営利活動法人 bond place

① 実績値

アウトプット	指標	目標値	達成時期	現在の指標の達成状況	進捗状況 *
No.1【プレイヤーづくり】 1-1 先行事例で実践されているノウハウや経験を分析し、山梨県におけるリンクワーカーの役割やスキルが抽出され、それらが反映された育成プログラムができた	1-1-1 インタビュー調査実施回数	6 回	2022 年 9 月	10 回 プログラム参加者と共に先行事例の実践者へのインタビューを実施。中間評価でプログラム参加者から生まれた実践も対象にインタビュー調査・分析を実施。	1
	1-1-2 分析ワークショップ実施回数	2 回	2024 年 3 月	0 回 →事後評価でリンクワーカー育成プログラム参加者の実践の分析からリンクワーカーの役割やスキルを抽出し、リンクワーカー育成プログラムに必要な要素を整理する。	2

No.1【プレイヤーづくり】 リンクワーカー育成プログラム	1-2-1 フィールドワーク実施報告回数	150回(チームごと月1回ずつ)	2024年3月	14回 第2期は講座内にフィールドワーク実施報告の機会を入れ込む。	3
1-2 まなぶ(ラーニングコミュニティ形成)地域の資源や課題が、フィールドワーク・事例検討ワークショップ・システム思考による分析等によって整理された	1-2-2 事例検討ワークショップ開催回数	15回(5回×3年間)	2024年3月	2回	3
	1-2-3 リンクワーカーが繋がった人の数、分野数	2250人(リンクワーカー1人につき30人ずつ)	2024年3月	講座内にフィールドワークの実践報告の機会を導入する。つながった人数だけではなく、どのようなつながり方をしたのか、今後の関わり方の展望、フィールドワークによってリンクワーカー育成プログラム参加者がどのようなことに気づいたかを把握できるようにする。	3
No.1【プレイヤーづくり】 リンクワーカー育成プログラム 1-3 つどう(リビングラボ)拠点づくり(地域×分野)・産学官金・地域住民協働での対話の場づくり・ロジックモデルづくり・プロトタイプが生まれた	1-3-1 リビングラボ開催回数(地域課題対話・ロジックモデルづくり・プロトタイプのアイデア出し・ふりかえり会)	12回(4回×3年間)	2024年3月	4回	2

<p>No.1【プレイヤーづくり】 リンクワーカー育成プログラム 1-4 むすぶ（次のアクションへつなげる）年度ごとの実践の成果が発表され、次へのアクションプランが生まれた</p>	1-4-1 発表会開催回数	15回（5チーム×3年間）	2024年3月	4回 （学習支援をテーマにした発表会は現在準備中。） → 発表会の企画は自由度高く各チームごとの特徴を活かした形での開催を目指した。ただ自由度の高さからチームごとの合意形成が難しく、なかなか企画が進まないチームもあったことから、2期では参加者それぞれの活動を周知する形での活動発表会の形で開催する。	3
	1-4-2 発表会参加者数	450人	2024年3月	365人	2
<p>No.2【フォロワー・文化づくり】 2-1 1年目：キックオフ・フォーラム「リンクワーカーって？」 リンクワーカーや社会的処方に関して、地域住民・介護医療福祉の専門機関向けに周知を行なった</p>	2-1-1 フォーラム開催回数	1回	2022年3月	1回 2021年8月25日にキックオフフォーラムを開催。	2
	2-1-2 フォーラム参加者数	100人	2022年3月	リアルタイム参加：105人 後日録画参加：68人	2

No.2【フォロワー・文化づくり】 2-2 2年目：5地域の拠点づくり（分野別拠点） 拠点ごとの年度報告会の開催 各地域・分野で生み出された実践・プロトタイプ の成果を発表した	2-2-1 報告会開催回数	1回	2023年3月	0回 2022年10月26日に開催予定。	2
	2-2-2 報告会参加者数	100人	2023年3月	0人	2
No.2【フォロワー・文化づくり】 2-3 3年目：5拠点+全県地域・分野を横断したコミュニティの形成。それぞれの知や経験を集約し、山梨が つながってみて何ができるか見せた	2-3-1 報告会開催回数	1回	2024年3月	0回	2
	2-3-2 報告会参加者数	200人	2024年3月	0人	2
	2-3-3 リンクワーカー・社会的処方 の認知度	フォーラム参加者へのアンケート調査。 リンクワーカーによる活動への期待度が高まっている状態。	2024年3月	0	2
	2-3-4 メディア掲載数	新聞・ラジオ・テレビ・ウェブメディアへの出演・掲載	2024年3月	0	2

*進捗状況：1 計画より進んでいる、2 計画どおり進んでいる、3 計画より遅れている、4 その他

② 事業進捗に関する報告

1.事業計画に掲げた短期アウトカムの達成の見込み
1.達成の見込み
2.アウトカムの状況
A：変更項目 <input checked="" type="checkbox"/> 変更なし <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの内容 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの表現 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの指標 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値
5.新型コロナウイルス感染拡大に対して、事業活動を行う際に工夫した点
第1期のプログラムは基本的にオンラインにて開催したことで、様々な分野・地域・ライフスタイルを持つ方が一緒に学ぶ環境ができた。そのおかげで多様な実践データが集まり、プログラム改善のための分析に役立った。またこうして隙間時間を活用してまで参加してくれた山梨県内外の参加者によって、貪欲に学びを持ち帰ろうとする姿や・地域での実践していく姿を近くで見させていただき、リンクワークの実践における中間支援の経験を得ることができた。

③ 広報 (※任意)

- 1.メディア掲載 (TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等)
「社会的処方学校」の Facebook ページを作成。

2020 年度事業 中間評価報告書（実行団体）

評価実施体制

内部／外部	評価担当分野	氏名	団体・役職
内部	インタビュー／分析／評価報告作成	芦澤 郁哉	NPO 法人 bond place ・ 理事
内部	インタビュー／分析	野口 雅美	NPO 法人 bond place ・ 監事
内部	インタビュー／分析	加藤 香	NPO 法人 bond place ・ 理事

A) 事業のアウトカムの進捗状況の評価

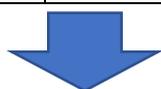
① 短期アウトカムの進捗状況

アウトカムで捉える変化の主体	指標	目標値	達成時期	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
リンクワーカー育成プログラム参加者	社会的処方の実践を目指した活動が生まれる	75 件	2024 年 3 月	24 件 ▶活動分野・対象者の分類 高齢者・介護・認知症、地域医療、まちづくり（若者世代）、ヤングケラー、学習支援、お寺、ワーケーション、子育て支援・育児に悩む親世代
	社会的処方の理解が進む	自分の活動分野・活動の状況・立場などを踏まえて、自分なりの社会的処方の捉え方ができるようになる。	2024 年 3 月	社会的処方の定義・実践のやり方をこちらから与えないことによって、参加者それぞれの力で咀嚼・定義付けする必要があった。分野の違う人たちとの対話をしたり、小さくても発信・アウトプットを続けたりしてきた人たちは自分自身の立場にあった社会的処方の捉え方が進み、自分の言

				<p>葉で社会的処方と語ることができるようになった。</p> <p>分野の違う人たちとの対話がより進んだ背景には、偶然性を楽しめることがあった。ランダムに選ばれたグループメンバーへの共通点や共感ポイントを見出そうとするプロセスによって対話の中でそれぞれの考えをぶつけ合うことで新たな視点を獲得していた。</p>
	自分の活動の仲間・協力者とながる	分野を超えた強みの違う仲間ができる。	2024年3月	<p>分野も違う初対面の人との対話の機会を持つことで、今まで当たり前に使っていた言葉をより噛み砕いて説明する必要があったり、いつも自分の現場では当たり前に行っていたことに他の参加者から感謝されたりする中で、他者との関係構築を丁寧に行うことができた。</p> <p>また、グループの中で他者の活動を楽しみながら、純粋な応援の気持ちでフィードバックを与えていた参加者のフォロワーとしての働きかけによって勇気づけられ、自分の現場での実践につなげるモチベーションを獲得していた。その現場での実践による気づきや悩みをグループに持ち帰ってシェアすることで、またフォロワーによるフィードバックにつながり、実践→ふりかえり・フィードバックのサイクルを回すことができていた。自分の活動を一緒にやるという意味での仲間ではなく、自分自身の活動へのモチベーションの回復、ふりかえりのための報告・フィードバックの機会をともにするフォロワーとしての仲間づくりが進んだ。</p>

リンクワーカーを 応援する人たち	リンクワーカー を生み出す中間 支援組織・支援 者との連携	山梨県内各地にいる中 間支援組織・支援者と 定期的に情報交換が行 われている状態	2024年 3月	リンクワーカー育成プログラムの参加者の中から、「身近な 地域に同じ感度で話ができる人が欲しい」「地域で求められ ていることが自分 1 人だけじゃやりきれなくなってきた」 「自分と同じように、専門家も地域に出てきて実践しながら 学び、本業に生かすサイクルを回してほしい」という声が出 てきている。こうしたニーズを持つ方々と一緒に、それぞれ の現場・地域でリンクワーカーを育成する仕組みの実現に向 けた議論を始める。
	リンクワーカー を生み出す中間 支援組織・支援 者との連携	リンクワーカー育成プ ログラムが山梨県内の 様々な場所で開催され ている	2024年 3月	リンクワーカー育成プログラムの参加者がそれぞれのフィ ールドに学びを持ち帰り、実践を始めている。 学びの持ち帰り方としては以下の3つがあった。 ●パターン1： リンクワーカー育成プログラムの中で新たに会った仲間 と新たな活動を生み出していく。 ●パターン2： リンクワーカー育成プログラムでの学びを自分の組織・団 体に持ってかえって、内部で取り入れ実践していく。 ●パターン3： 一緒に活動していく仲間と共にリンクワーカー育成プログ ラムに参加して、共通言語や共通認識を広げていく自分の 地域・組織で実践する時に、一緒に作戦を練ることができる。

孤立・孤独状態に いる当事者	孤立・孤独状態に いた当事者につ ながりが生まれ る	地域や制度の狭間で困っ ていた孤立孤独の当事者 がリンクワーカーのアプ ローチによって救われて いる。	2024年 3月	中間評価時点では測定できず。
-------------------	-------------------------------------	---	-------------	----------------



② アウトカムの分析「⑧アウトカムの達成度」(※任意)

評価小項目	評価小項目の評価結果	評価結果の考察
リンクワーカーが育っているか	講座での個人による学びだけではなく、参加者同士のグループでの対話を通じて学びを整理することができた参加者は、自分の現場での実践につながり、リンクワーカーとしての成長につながった。	リンクワーカー育成プログラムの中での気づき・学びを自分自身の活動や組織の中で活用していくことによって、今までアプローチできなかった孤立・孤独の当事者にアプローチできるようになり、地域にインパクトが生まれていく。だからこそ、学びを得て終わりになってしまうプログラム運営ではなく、参加者それぞれの実践に対する個別フォローアップが必要になる。 第2期のプログラム開催に向けて、講義を増やすのではなく、実践することをより意識し、参加人数をより絞ったゼミ形式での開催によって、参加者が「講座による学び→実践→ふりかえり→教訓に落とし込む」という経験学習サイクルを回していくことを重視したプログラム運営を行う。
リンクワーカーを生み出す仕組みができているか	bond place が取り組んでいる女性起業支援の分野だけではなく、介護・福祉・医療・まちづくりなどの他分野で地域プレイヤーに関わり、リンクワーカーへと成長していくのに伴走できる存在が見つかった。	また、こうした実践ありきの育成プログラムになるため、学びを実践できる自分なりの活動フィールドを持っていることが重要になる。「こんなことやってみたいな」というアイデアを持っているがなかなかまだ実

<p>リンクワーカーによって、孤立・孤独状態にいる当事者が救われているか</p>	<p>中間評価ではまだ測定できず。</p>	<p>践には至っていない段階や、小さく実践しながら自分自身の活動や場の軸づくりに集中する段階（地域プレイヤーの段階）を経た上で、このリンクワーカー育成プログラムに出会うことができるように、第1期のプログラム参加者の周辺にいる人等を中心に、第2期プログラムへの参加者募集をしていく。</p>
--	-----------------------	--



事業のアウトカムの進捗評価	評価結果の考察
<p>事業のアウトカムの進捗の程度は、事業終了時には</p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値を上回っての達成の見込みがある <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成の見込みがある <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値はおおむね達成できる見込みがある <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は不透明である <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は難しい <p>と自己評価する</p>	<p>「社会的処方」というキーワードが、自分達の想像以上に医療分野以外の人たちにも関心のある概念だということがわかった。</p> <p>孤立や孤独の解消、人と人のつながりづくりというキーワードはまちづくりや子育て世代、学習支援などの若者世代向けに活動している人たちにも共通する関心ごとであり、社会的処方をキーワードに様々な分野の実践者たちが集まり、それぞれの知見を集積させていくことで、目標値を上回る実践事例などが生まれてくるのではないか。</p>

B) 事業の改善状況の評価

① 事業の実施過程・事業改善に関する評価

評価項目	評価小項目	評価結果	考察
実施状況の 適切性	リンクワーカーを生み出す中間支援組織・支援者との連携は十分か。	bond place が取り組んでいる女性起業支援の分野だけではなく、介護・福祉・医療・まちづくりなどの他分野で地域プレイヤーに関わり、リンクワーカーへと成長していくのに伴走できる存在が見つかった。	リンクワーカー育成プログラムの参加者の中から、「身近な地域に同じ感度で話ができる人が欲しい」「地域で求められていることが自分1人だけじゃやりきれなくなってきた」「自分と同じように、専門家も地域に出てきて実践しながら学び、本業に生かすサイクルを回してほしい」という声が出てきている。こうしたニーズを持つ方々と一緒に、それぞれの現場・地域でリンクワーカーを育成する仕組みの実現に向けた議論を始める。
	事業設計の見直し・改善は行われているか。	リンクワーカー育成プログラム1期生への事後アンケートの実施、1期生の学び・実践の観察を行い、事業設計の見直しポイントとして、以下の2点を改善した。 1. 「地域プレイヤー」と「リンクワーカー」を区別する。	1. 「こんなことをやってみたい」という思いつきの活動の原点には、人やメディアから聞いた情報や自分自身の過去の経験による問題発見・課題設定がされていることが多い。それらの全てが間違えているわけではないが、一つの出来事もその背景には様々な原因が複雑に絡み合っており、その複雑さは小さく実践して活動を改善しながら紐解いていくことで構造を理解できるようになる。こうした小さな実践を繰り返す中で複雑な問題を整理していくことが、偽解決に陥らないためには欠かせない。 だからこそ最初は失敗しながらでも小さく実践し、その実践から学んでいく期間が必要である。この思いつきのアイデアを小さく実践しながら学び、複雑な問題構造を紐解こうとしている期間の活動者を「地域プレイヤー」と私たちは定義づけした。

		<p>2. ストーリーオブセルフによる共感のつながり方だけでなく、あくまでも別の考えの人という前提でのつながり方（協力のテクノロジー）の導入。活動の継続性の向上や事業化を考え、仲間や協力者の集め方の知識やスキルの強化の必要性がある。</p>	<p>その段階を経て、今地域で起きている問題がある程度理解され、自分が果たすべき役割や変化の仮説が見えている状態になっている活動者を「リンクワーカー」と定義付けし、こうしたリンクワーカーの活動に様々な人が協力したり、リンクワーカーが行政等の専門家や地域での活動をつないでいくことで、制度や地域の狭間で困っている孤立・孤独の当事者が救われていく地域を目指す。</p> <p>2. つながりづくりを目指す活動の担い手の多くは、自分自身の過去の当事者経験が活動の原点・モチベーションになっていることが多い。そうした当事者性の高さがゆえに、自分自身の当事者経験を相手に押し付けてしまうことが危惧される。こうした活動フェーズにおいては、着実に地域での場づくりの実践を積み重ねながら、自分の活動への理解者・応援者からの共感をエネルギーにして、自分自身の当事者性との付き合い方を身につけていく必要がある。本事業においては、リンクワーカー育成プログラムの参加者同士のナラティブを語り合うことから共感を生み出し、それぞれの活動への理解者・共感者を増やしていくことを狙いとしているが、そうした仲間の集め方だけでなく、ドライな関係（能力ベース）の中で協力関係を生み出していく手法を身につける機会も必要だと考える。第1期参加者アンケートからも「なかなか自分の活動を周囲の人に理解してもらえない」という不安の声が多く上がったが、程々の理解・共感でも協力関係をつくることもプログラムの中で紹介し、より多くの協力者を得られるようになることを目指す。</p>
--	--	--	---

<p>実施をとおした活動の改善、知見の共有</p>	<p>地域でのリンクワークの実践に影響を与えた貢献要因は何か。</p>	<p>リンクワーカー育成プログラム第1期参加者への事後アンケート、インタビュー、分析を経て、次の5つの貢献要因が明らかになった。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 偶然性を楽しめる 2. 自分自身を開示できる 3. フォロワーの存在 4. 報告やフィードバックが生まれる 5. インプットを自分の中で消化して、アウトプットする場を持つ 	<p>1.偶然性を楽しめる</p> <p>「一番変わったのはつながり方の変化。事前に意図してつくったつながり方だけでなく、講座の中でバツとつくったランダムなつながり方でもいろんな糸口を探することで人と人ってつながれるんだということを感じた。“こういうつながりがあればあの人を救ってあげられるだろう”という計算したつながり方では、意識しすぎてしまったり構えてしまったりしてしまうことがあり、限界も感じていた。突然出会った人たちとも対話をする中でつながることってできるんだということを自分が体験した。つながり方が変わったことで、自分の幅が広がった。どんな人でもつながることが出来るんじゃないかと思えるようになった。」</p> <p>→支援を目的としたつながりの処方になると、どうしてもそこには支援者の意図が入り込んでしまう。ただ本来人と人との出会いは偶然性の高いものであり、どんな人とどんなタイミングでどのようにしてつながるかは自由に決められるものである。プログラム参加を通じて偶然の出会い・つながりを楽しむ経験ができたことで、人間が本来持つ“生きるために人とつながろうとする力”を感じる事ができたのではないか。</p> <p>2.自分自身を開示できる</p> <p>「みんなでグループディスカッションをして、グループの人に質問してそれに返事があるという勉強のスタイルが良かった。こういう状態でこういう思いでこういうことにモヤモヤしているんだけどどうしたらいいですか?ということ、本当にそれを抱えているタイ</p>
---------------------------	-------------------------------------	---	---

		<p>ミングで質問ができて、それに答えてもらったのが実践するのに役立った。」</p> <p>「好奇心旺盛なグループで、実はグループのみんなが当事者研究のようなこともやった。その中で自分のことを話したときに、グループのみんなが“話してくれてありがとう”と伝えてくれたのが初めての経験だった。」</p> <p>→勇気を出して自己開示をしたときに、まず周りからのリアクションをもらった事で喜びを感じる事ができた。この人たちにだったら色々話しても大丈夫という安心を感じられるようになった。</p> <p>「活動の中では初めて会う人と一緒に動いていくこともあるけど、そういう時でもこうやって集まったんだから同じ方向を向いてやっていけるという事が、プログラムでのグループワークを通じてわかった。初めは迷うこともあるだろうけど、とにかく話し合ってみよう・わからないところはちゃんと言おう・ちょっと今嫌な時もちゃんと言おうということ意識するようになった。」</p> <p>→グループでの活動で自己開示がうまくできた経験を積むことで、自分の活動の周辺にいる人たちの自己開示をサポートする役割を意識するようになった。</p> <p>「いろんな分野の人たちとの対話の中で、自分自身のこだわりや想いが、自分の中のどこから来ているのか気付かされた」</p> <p>「当たり前を雑にしてはいけないことに気づいた。関係の質はドリップのようにちょっとずつで、日頃の積み重ねを丁寧にする事が大事だとわかったら、今の自分がある環境や取り組みを大事にしなま</p>
--	--	---

		<p>やいけないと気づいた。」</p> <p>→グループの中でそれぞれが自己開示して対話を積み重ねることで、自分自身の内面に気づく機会にもなった。</p> <p>3.フォロワーの存在</p> <p>「1 番目のファンがいてくれるかという動画が印象的だった。改めて自分がすでに走らせている事業を思い返して、誰が第1のファンになってくれてこの事業が続いているのかをふりかえるきっかけになった。」</p> <p>「スタッフ側で仲間を集めるだけでなく、参加してくれるファンが仲間になっていくこともあるということが理解できた。参加してくれた側の人に関わることで事が動くこともあると理解した。」</p> <p>→自分の活動に参加する人の中からファンが生まれ、その人たちがやってみたいことも自分の活動に取り入れていくと活動や場が変化していく。サーバント型のリーダーシップによって、こうしたファンがただの参加者からスタッフ的な役割を担っていく流れで、参加者の主体性も上がるので、より社会的処方が進むのではないか。</p> <p>4.報告やフィードバックができる</p> <p>「1人だとなかなか動けない。周りに背中を押してくれる人やアドバイスをくれる人、分野は違って何か似たような目標で行動している人がいることで、じゃあ真似してやってみようと思えた。」</p> <p>「グループの中で他の参加者の実践報告に対してみんなでアドバイスしている中で、場づくりでよく起きることへの共感が生まれたり、</p>
--	--	---

		<p>自分自身の活動をふりかえる機会にもなって、アドバイスしている側も自分の現場で使えるものを得る事ができた。」</p> <p>「今まで自分の組織の中だけで考えていた。皆さんと話をすることで、考え方・向き合い方が参考になった。同じ研修を受けたことをきっかけに、それぞれがどう思ったかを話す事ができた。」</p> <p>→グループの中で自己開示が適切に出来ると、それに対する他の参加者の実践経験からきたアドバイスが得られた。そのアドバイスをまた自分の現場で実践し、また次回の会でその報告をしていくというPDCAサイクルが回っていた。</p> <p>5. インプットを自分の中で消化して、アウトプットする場を持つ。</p> <p>「これまでの経験で作られた自分の思考の固さをほぐす場面があることで動きやすくなる。ほぐす期間を視点が違う人たちと一緒に過ごすことで、考え方や取り組み方を変える事ができたり、アイデアをよりあたためる事ができた。」</p> <p>→インプットした内容を自分自身の言葉で咀嚼していく中で、自分が持っている現場での活用の仕方を考える事ができた。</p> <p>「自分自身で取り組んでいる事実がないと自信も持てないし、周りからもすごくよく考えている人なんだねという評価だけで終わってしまうので、実践をする場をまずひとつ作る事ができて良かった。」</p> <p>→アイデアを話すだけではなく、それを小さくても実践する場を持つことによって周りの人たちからの理解・評価が得られる。こうした実績の積み重ねによって、周りの人たちからの協力や新たなオフ</p>
--	--	--

			ア-を得る事ができた。
組織基盤強化・ 環境整備	助成終了後もリンクワーカーを生み出し、育てる仕組みづくりを継続・発展するために必要なのはどのような連携か。	現時点での本事業へのステークホルダーマップを整理し、第1期のリンクワーカー育成プログラム参加者との連携のもと、山梨県内各地での展開を目指していく。	4月に第3者評価で作成したステークホルダーマップでは、私たちから医療・介護・福祉の専門機関への距離感の遠さが目立ったが、今回作成したステークホルダーマップでは、第1期のリンクワーカー育成プログラムの参加者がその間をつなぐ位置にいる事が確認できた。 今後第2期、第3期とリンクワーカー育成プログラムの参加者が増えていくが、参加者それぞれの現場での実践へのフォローアップを丁寧に行う中で、医療・介護・福祉の専門機関との連携・協働を目指していく。

② 短期アウトカムの状態の変化・改善に貢献した要因や事例

リンクワーカー育成プログラムでの学びを通じて、様々な分野の人たちと自分自身がつながることができた経験を通じて、「人と人がつながること」に対する捉え方が変わり、自分の活動・組織での活動の中で出会う人にも優しく接することが出来るようになった。

リンクワーカー育成プログラムの中ではその場でバツと決められたランダムな人との対話の機会があったが、そのグループの中では「相手のことをもっと知りたいな」と自然になっていった。対話を通じて自分が脱がされていくような感覚だったのだが、それは同じグループの人たちがもうすでに裸で楽しそうにしている、自分も脱いでみたことで新たな発見が得られた。人のパンツを履けば履くほど自分のパンツのことがよくわかった。これは一度裸にならなければ履けなかった。

自分自身がこういう体験をしたことで、他の人への興味も増えていった。

③ 事前評価時には想定していなかった成果

「学校」というスキームにしたことによる効果。学び合いを前提としたつながりによって、分野の違う人同士でも対話の土壌を作ることができた。わからないことも素直に発信することで、参加者同士での交流・対話が生まれた。社会的処方という概念が新しいものをテーマにしたことで、それぞれの分野で社会的処方とのつながりを感じて県内外問わず様々な分野の活動実践者が参加した。



④ 事業計画の改善の必要性の確認

- 社会課題のニーズに事業計画の内容は合致している
- 受益者や事業対象グループのニーズに事業計画の内容は合致している
- 事業計画に記載している活動は、アウトプット⇒アウトカムへのつながりが実際に確認できている
- 残りの期間の資金配分・人員体制・スケジュールは活動を円滑に行えるよう計画されている
- 短期アウトカム指標は、事後評価時に測定し、達成度を評価することが可能な内容になっている



事業の改善状況の評価結果	評価結果の考察
<p>残りの事業期間で、事業が短期アウトカムを達成するために</p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> 事業計画は適切に改善されたといえる <input type="checkbox"/> 事業計画を適切に改善する見込みがある <input type="checkbox"/> 事業計画の改善について、課題が残っている <p>と自己評価する</p>	<p>リンクワーカーが育つはばっちり。今後注力すべきなのがリンクワーカーを応援するネットワークの構築。社協などになかなかつながっていなかった部分を、1期の参加者が入ることにつながる。</p>

⑤ 中間評価結果を踏まえて今後注力したいまたは早急に取り組みたい事項をお聞かせください。

リンクワーカー育成プログラム第2期、第3期の準備。講座・ワークショップでの関わりだけではなく、参加者による現場での実践への個別フォローが重要になるため、フォロー役として第1期参加者や中間支援組織へのオファーも検討していく。

リンクワーカー育成プログラムの参加者は得た学びを実践することで、参加者自身の考え方や周囲の人との関係性、アプローチできる孤立孤独の当事者像が変化していくので、講座・ワークショップなどのインプットの機会をなるべく早く提供し、じっくりと実践できる期間や事後評価のための分析・育成プログラムのメソッドの整理などに時間をかけられるよう、事業計画を見直していく。

添付資料

活動の写真（画像データは1枚2MG以下、3～4枚程度）